

『新・未来をひらく歴史』合評会

新企画説明

日韓交流委員会事務局長 糟谷政和

歴教協日韓交流委員会では 2025 年 10 月以降議題の一つとして、『新・未来をひらく歴史』（高文研、2025 年 9 月）の合評会を開催しています。その検討内容を今後継続的に紹介してゆきます。第 1 回目の第 1 部第 1 章は東アジア歴史教育交流の新たな深化のはじまりが期待できる内容でした。さらに「歴史総合」での利用を想定した内容と質問形式で構成されていることを確認しました。今後は、事実関係の検証や質問内容の検討を進め、歴史教育の現場での活用のためにも活発な意見交換につとめます。今後継続的に合評会内容を紹介してゆきますので、ぜひご意見をお寄せください。よろしくお願いいたします。

第 I 部「東アジアの変動と近代化」第 1 章「開港と近代化」（16-41 頁）

糟谷政和

1. 第 1 章の構成

第 1 節 ヨーロッパは、突然、東アジアにやってきたのか（執筆：中国・侯中軍、分担執筆：日本・大日方純夫）

第 2 節 外交交渉はどのような言語で進められたのか（執筆：韓国・金鐘学）
コラム：メキシコ銀（執筆：中国・侯中軍）

第 3 節 どこで「西洋」と接したのか—西洋との出会い（執筆：大日方純夫）

第 4 節 民衆は新しい国家の建設にどのように対処し、参加したのか（執筆：中国・侯中軍）
コラム：民間宗教と男女平等（執筆：韓国・王賢鐘）
コラム：万歳（執筆：大日方純夫）

2. 内容検討

(1) 第 1 節 ヨーロッパは、突然、東アジアにやってきたのか

- 1) 15～17 世紀、東アジアとヨーロッパはどのような関係だったのか
- 2) 18 世紀、東アジアとヨーロッパは、どのような状態だったのか
- 3) 東アジア各国はどのように開港したのか

【内容紹介】

- 1) 開港までの東アジアとヨーロッパとの関係が要約的に書かれていて、「突然」ではないことは理解できる。→3) 「ヨーロッパは 19 世紀中頃に突如として東アジアに現れたわけではありません。」（21 頁）
- 2) 「この時期、朝鮮とヨーロッパの間に直接の関係はありませんでした。」（18 頁）
- 2) 琉球王国の中継貿易、長崎での日本と中国の交易、釜山での日本と朝鮮の交易
- 2) 産業革命の「イギリスにとって、巨大市場の中国を「開放」させることが重要な課題となってきました。」（19 頁）
- 3) 3 国の開港の仕方は異なる。イギリスはアヘン戦争に勝利して中国と南京条約締結、日本はアメリカの圧力下に交渉して日米和親条約締結、朝鮮は倭米の通商要求を軍事的に抵抗したが日本軍の江華島侵攻後に江華島条約締結。

【感想】

- ① 東アジア 3 国の「海禁政策」の時期に、3 国が主体的に西洋の文物に接し、必要なものは受容してきた歴史が分かりにくいと感じた。もっとも本書の対象が近現代史なので仕方がないが。例えば日本で蘭学が

ら学んだことは無視できないのではないか。

(2) 第2節 外交交渉はどのような言語で進められたのか

- 1) 中国と西洋列強の外交交渉はどのような言語で行なわれたのか
- 2) なぜ日米交渉にはオランダ語の通訳が必要だったのか
- 3) 米朝修好通商条約はなぜ中国人が通訳を担当したのか
- 4) 東アジア諸国間の条約では、どのような言語が使用されたのか

コラム：メキシコ銀

【内容紹介】

*3国が置かれた状況が条約交渉や条約文作成に反映した。

→中国：戦争での敗北、日本：軍事的脅威下、朝鮮：自主的(25頁)

- 1) 中国は敗戦後の条約交渉で条約内容の完全な合意は困難なまま締結した。

1842年南京条約締結、条約文は英語と中国語で作成。イギリスの宣教師が通訳。

1862年中国初の官立外国語学校「同文館」設置し、『万国公法』翻訳着手。

- 2) 日本はアメリカの軍事的圧力下ながらオランダ語を仲立ちとして条文を理解して締結。
- 3) 朝鮮とアメリカの条約は、漢文が主体となり、朝鮮さらには中国の立場が保たれた。
- 4) 1871年日清修好条規は漢文主体作成、1876年日朝修好条規は漢文作成、1882年中朝商民水陸貿易章程は漢文作成。3つとも漢文を基準に作成され、当時の3国の関係を反映。

○コラム：(メキシコ銀)中国や日本と西洋間の貿易決済にメキシコ銀が使われるが、一方で金と銀のレート差で金流出も。

【感想】

①条約締結時の国家関係は条約文にみる不平等性や領土割譲で分かるが、条約締結時の使用言語にも条約の性格が現れているとのことである。しかし条約文の検討と使用言語の検討はあわせて行うことが望ましいと感じた。4)の3つの条約がともに漢文で作成されていたとしても、国家関係は対等/平等とは言えないのではないか。日朝修好条規(江華島条約)の不平等条項は無視できない。

②ペリーは琉球とどのような言語で交渉したのだろうか。

(3) 第3節 どこで「西洋」と接したのか—西洋との出会い

- 1) 人びとは、どこで西洋と接したのか
- 2) 西洋式の街並みや景観はどのように広がったのか
- 3) 西洋を認識するうえで、キリスト教はどのような役割を演じたのか

【内容紹介】

1) 3国とも条約の結果、開港場に租界・居留地ができ西洋人が居住し、朝鮮は日本・中国・西洋の居留地が設置された。なお、3国における租界・居留地の廃止時期は異なる。

2) 3国とも開港後に急速に西洋文化の流入と受容が進むが、3国で時期が異なる。中国の洋務運動、日本の文明開化。朝鮮は言及なし。

3) 3国とも開港以前はキリスト教はしだいに禁止されるが、開港後西洋の近代文化も広がりとともにキリスト教も広がり、社会変革運動にも大きな影響を与えた。その影響故に反発もあった。

・問い「キリスト教の布教と西洋の東アジア進出との関係を考えてみましょう。」(33頁)

【感想】

①3国は開港の時期も異なるために接する西洋の状況も異なり、またそれまでの各国の歴史展開の違いによっても、3国の西洋文化の広がりには3国異なることが再確認できる。

(4) 第4節 民衆は新しい国家の建設にどのように対処し、参加したのか

- 1) 西洋の政治思想は東アジアにどのように伝わったのか
- 2) 日本の自由民権運動はどのように展開されたのか
- 3) 中国の人びとの政治参加の動きはどのように起きたのか
- 4) 韓国の独立協会運動はどのような目標を達成しようとしていたのか

コラム：民間宗教と男女平等

コラム：万歳

【内容紹介】

1)「開港以後、三国の人びとはさまざまな新聞・雑誌や印刷物を通して西洋の文化と生活様式を理解し始めました。」(35 頁)3 国で理解する時期が大変異なる。

中国：魏源『海国図誌』1842 年刊、日本：福沢諭吉『西洋事情』1866～70 年刊、朝鮮：

兪吉濬『西遊見聞』1895 年刊。

2) 明治維新後、西洋の近代思想と政治制度が紹介され、自由・民権の思想も日本社会に広まり、1870 年代半ばから反政府運動としての自由民権運動がおこる。

3) 中国では 1895 年「下関条約」反対上の奏文、康有為・梁啓超ら維新派の戊戌の変法、民権・平等・自由の思想が広まる。清朝政府に真の改革をせまり、革命に向かう。

4) 朝鮮では自由民権思想の広まり、1898 年独立協会と万民共同会の大集会という民権啓蒙運動が広がり、国政改革を求めたが、成功しなかった。

それぞれに西洋に学んだ 3 国の歩みは一樣ではなかった。具体的には第 2 章に詳述。

・問い「西洋の衝撃に直面した東アジア三国が、なぜ異なった道を歩むことになったのか、考えてみましょう。」(39 頁)

○コラム：(民間…)男女平等を追求した、日本・天理教、中国・拝上帝会、朝鮮・東学。ともに影響力は大きかったが、男女平等の実現は困難であった。

○コラム：(万歳)中国は皇帝の長寿を祝う言葉、日本は天皇を祝福する言葉、朝鮮は国家(君主)に人びとを統合する言葉だが「万歳」が独立と結びついた。

【感想】

①「三国が西洋から学んだ程度とその効果は異なりました」(39 頁)と言って、開港以後に西洋に学ぶ 3 国だが異なる道を歩むことを述べ、その理由を考えるように求めている。しかしその理由を考える手掛かりは第 2 章以降にあるようだ。

②3 国の違いに焦点を当てているが、一方で成功しなかったかもしれないが 3 国ともに協力しあって歩もうとした動きは、第 2 章以下の本書で触れられるのだろうか。

第Ⅰ部第Ⅰ章第Ⅱ節「外交交渉はどのような言語で進められたのか」の記述に関する意見

平野昇

1. 前回の学習会で、私は、日米和親条約の交渉では「オランダ語と中国語を介して2段階で通訳を行わざるを得ませんでした」という本書24頁16行目からの記述は誤りで英語を介してではないか、という意見を出しました。調べたところ、同条約交渉が英語で行われたという事実はなく、これは私の記憶まちがいで誤りでしたので、撤回します。

2. 改めてこの節を読み返してみると、以下のようないくつかの事実に関するまちがいや、記述について筆者とは異なる意見があるので書いてみます。

①23頁16行目に「朝鮮・日本など東アジアの諸国との初期の外交交渉で通訳を担当した言語の専門家は、ほとんどが宣教師でした。」とあります。

少なくとも日米和親条約の交渉では、宣教師は参加していません。アメリカ側は、本書26頁の注の(4)にあるように宣教師ではありませんし、日本側は、幕府の通詞です。

朝鮮と中国との交渉に宣教師が加わっていたかは調べられませんでした。日本に関する限りこの記述は誤りということになります。

②26頁6行目「(日朝修好条規)の条約文は漢文で作成されました。」は、事実とは異なります。

日朝修好条規の第三款には「嗣後兩國相往復スル公用文ハ日本ハ其國文ヲ用ヒ今ヨリ十年間ハ添フルニ譯漢文ヲ以テシ朝鮮ハ眞文ヲ用フヘシ」(下線は平野)とあるので、条約文は日本語と漢文で作成されたというのが事実です。

左は、国立公文書館アジア歴史資料センターのデータベースにあった日本語原文¹です。

なお、1871年に締結された日清修好条規の正文も日本語と漢文で作成されています。

そうなると同書27頁の第2節のまとめの文「このように日中朝三国のあいだの条約は、漢文を基準に作成されました。」というのは妥当な表現だとは思えません。この三国間で外交上公用語とされていた言語で条約正文を作成したという方が適切ではないでしょうか。



3. 以下は、記述内容について日本側の歴史学上の見解とは異なる記述だと思われる問題点を書きます。

①この節の第2項にあたる「なぜ日米交渉にはオランダ語の通訳が必要だったのか」の最後の文章は、「(日米修好条約は：平野) 南京条約や天津条約とは異なり、敗戦の結果として締結された条約ではなかったため、条件が片方の当事者にだけ不利なものではありませんでした。」となっています。日米修好通

¹ <https://www.digital.archives.go.jp/das/image-j/M0000000000000107866>, 2025/12/14

商条約は、不平等条約だったというのが日本史の一般的な認識²なので、この文の後半は私としては間違っているのではないかと思います。それに、この文はこの項の問いかけ「なぜオランダ語の通訳が必要だったか」の答えになっていません。

この記述を同書 2 2 分の中国についての記述「こうして 2 度のアヘン戦争に敗れた中国は、一連の不公平な条約を西洋列強と結ばなければなりません。これを不平等条約 (unequal treaty) といいます。」と比べてみると、中国は列強との戦争に敗れたので不平等条約を押しつけられたが日本は戦争に敗れていないので不平等条約を結ばされることはなかったと読めます。こういう理解でよいでしょうか。

私は、南塚信吾氏の以下のような見解が妥当だと思っています。「日本の側で見ると、西洋列強が 1848 年の諸革命に専念している間に、アメリカが接近しているとはいえ、東アジアにおいて列強の政治的・軍事的活動は限られていた。その間に日本は開国に向けて準備をする期間を得た。日本は、アヘン戦争の教訓を学び、また、世界の情勢を知る「猶予期間」を得た。その結果がやがてアメリカとの開国交渉に反映することになる。(中略) こうして、世界情勢の収集と学習を背景に、幕府が外交交渉を行う準備はできていった。」³

西洋列強との戦争に敗れたから不平等条約を押しつけられ、そうでなかった国は不平等条約を免れというような本書の主張は妥当でしょうか。その時点での歴史的、地理的な条件から、中国は東アジアの中で最初に不平等条約を結ばされたと考えるべきではないでしょうか。

②第 3 項「米朝修好通商条約はなぜ中国人が通訳を担当したのか」は、以下のように書き始められています。「朝鮮の条約締結の特徴は、第一に、西洋列強ではなく、同じ東アジアの国家であり、以前から国交があった日本と最初に近代的な条約を締結したことにあります。また、第二に、西洋列強との条約締結は、戦争での敗北、またはその軍事的威嚇に屈服した結果ではなく、自発的に行われたこと」。としています。

上掲の「特徴 第一」に書かれていることは、事実です。しかし、日本が不平等条約を朝鮮に押しつけた⁴という記述がありません。この史実を書かずに日朝の近代史は語れないと思います。

上掲「特徴 第二」は、朝鮮と西洋列強との条約締結について書かれているということは理解します。ですが、日本と朝鮮間では、日本による「戦争での敗北、またはその軍事的威嚇に屈服した」という表現に近い状態の結果として日朝修好条規が結ばれているというのが日本の歴史学の理解です。従って、上掲の記述は不正確とは言えないかも知れませんが、重要な史実が抜け落ちていると言わざるを得ないと考えます。⁵

² 「その骨子は、開港場居留地での自由な居住貿易権（第三条）、片務的領事裁判権（第六条）、協定関税（第四条）、和親条約の片務的最恵国待遇を三本の柱とする不平等条約である。」

秋本益利『国史大辞典』ジャパンナレッジ、2025/12/14

³ 南塚信吾『シリーズ日本の中の世界史 「連動」する世界史—19 世紀世界の中の日本』、2018 年、岩波書店、39～40 分

⁴ 「修好条規第一款の規定とはうらはらに、朝鮮は日本によって一方的で苛酷な不平等を強いられることになった。」 中塚明、『国史大辞典』ジャパンナレッジ、2025/12/14

⁵ 「黒田らは（1876 年：平野）二月四日、江華島に到着、十日上陸、翌十一日、「紀元節」の祝賀として日本艦隊のうちは一艦砲の砲声のもと、日朝修好談判を始めた。十二日、日本側の条約案を示し、回答期限を十日間と限り、確答がなければ軍事的圧迫を加えるとほのめかした。朝鮮政府では、議論百出したが、結局、日本の武力誇示に屈し」中塚明、『国史大辞典』ジャパンナレッジ、2025/12/14

第1部第2章「日清戦争と東アジア伝統秩序の解体」

三橋広夫

1. 枠組みの比較

『新・未来をひらく歴史』(2025年)

第2章 戦争と東アジア秩序の再編成

- 第1節 日清戦争で誰が何のために戦ったのか
- 第2節 日露戦争は人びとの世界観をどう変えたのか
- 第3節 日本はどのように台湾を植民地支配したのか
- 第4節 日本は朝鮮をどのように支配したのか
- column 日本軍が戦争に動員した馬
- column 正露丸の誕生
- column 1900年のパリ万国博覧会

『未来をひらく歴史』(2005年)

2節 東アジアを巻き込んだ戦争

- 1. 3国の争い
- 2. 日清戦争
- 3. 日露戦争

コラム：福沢諭吉・金玉均・李鴻章

『新しい東アジアの近現代史 上』(2012年)

2章 日清戦争と東アジア伝統秩序の解体

1節 1880年代における東アジアの変動と朝鮮問題

東アジアの変動/壬午軍乱をめぐる3国関係/甲申政変と西洋列強の介入/不平等条約と条約改正問題

2節 日清戦争

戦争前夜の東アジア/東学農民戦争と日清の出兵/日清共同改革提案/朝鮮王宮占領事件/日清戦争の展開/朝鮮農民軍の抗日闘争と甲午改革

3節 下関条約と3国関係

日清の下関条約/遼東半島の割譲と三国干渉/清の台湾割譲と日本の台湾侵略戦争/日清通商航海条約/日清戦争が朝鮮に与えた影響

コラム＝清の朝鮮政策

コラム＝日本の大陸政策をどう見るか

コラム＝条約体制と治外法権

3章 日露戦争と列強の覇権争奪

1節 日清戦争後の東アジアでの列強の角逐

西洋列強の中国分割と日本/日露の朝鮮における対立と協商/大韓帝国と独立協会/義和団事件と8カ国連合軍の中国侵略戦争

2節 日露戦争の原因と結果

日英同盟/清露「満州還付条約」と日露戦争の勃発/「日韓議定書」と「日韓協約」/日露戦争が3国民衆にもたらした災難

3節 ポーツマス条約」と東アジア

西洋列強と「ポーツマス条約」/第2次日韓協約と第3次日韓協約/日本が満州で略奪した權益

4節 東アジア内部の大変動

朝鮮の抗日義兵運動/日本の強制的な韓国併合/中国の憲政改革と辛亥革命

コラム=国際政治と朝鮮中立化構想

コラム=亜細亞和親会

*ここからわかるのは、「通史」と「テーマ」の2冊に分けて叙述した『新しい』とは違って、『未来を開く』の叙述方式を取っていることである。さらに、コラムを見ると、『未来を開く』と『新しい』は、本文で書けなかった部分をコラムで追加的に叙述しているのに反して、コラムの叙述を通してこういうところからも歴史を見ることができるといふ新しい視点を指摘している。

2. 視点の比較

今回、節の最初に著者による問いが提示され、節の最後に著者のメッセージがあることが特徴の一つになっているので、それを分析する。

1-2-1 「資料①の凱旋門に日本と朝鮮の国旗がなぜ並んで掲げられているのでしょうか。勝利した日本

軍はなぜ朝鮮の首都で記念の式をしようとしたのでしょうか」(p. 42) ワンドンゴン 王賢鐘 (韓)

*問いとしては良いと思うが、本文を理解した上で深く考える必要がある。

④「日清戦争は日本が東洋平和や文明化を叫んだ正義の戦争と見るべきでしょうか。むしろ、日本帝国主義が東アジア各国の民衆を抑圧し犠牲にした侵略戦争として記憶すべきではないでしょうか」(p. 47)と筆者の意見を全面的に披瀝している。

1-2-2 「この風刺画(ビゴー画 日露戦争前の国際関係)から、どんな国際関係が浮かび上がってくるのでしょうか」(p. 48)

*これはビゴーの認識が表現されている資料なので、批判的に分析する必要がある。

④「日本・中国・朝鮮それぞれの民衆にとって、日露戦争がどのような意味をもったのか、その後の東アジア三国の歴史を学びながら、考えてみましょう」。

*これは、この節のふり返りというよりもこれから先の歴史をしっかりと学ぶよう促すものとなっている。ここでは、この節を読んで考えるべき課題を提示すべきである。さらに、52 ページに「開戦前から朝鮮の世論は」とあるものの、数行下に「韓国政府は」とある。文脈からいうと日露戦争直前であれば、「韓国の世論は」とすべきであろう。

1-2-3 「では、日本はどのように台湾を植民地支配したのでしょうか。また、日本の植民地支配のもと、台湾の人びとの生活はどのようなものだったのでしょうか」(p. 54)

*ここだけ文字資料。p. 60 には朝鮮総督府庁舎があるのだから、ここは台湾総督府庁舎を載せるべき。福沢の文章を引用しているが、「自由・平等を鼓吹した近代の著名な啓蒙思想家」と大仰な形容詞をつける必要はない。「近代の啓蒙思想家」で十分だ。福沢は思想的には当時の世論をかき立てたかもしれないが、政府の方針を決定する立場にはないので、台湾植民地化の資料としては適切ではないように思う。

*本文 54 ページに「台湾は本来、清の領土でした」という記述がある。「本来」とはどういう意味だろうか。清=外来政権とする台湾人の認識とは異なる。

④「日本が台湾を植民地支配した 50 年間、台湾住民が日本「国民」と同等の扱いを受けたことはなく、一貫して奴隸的な地位に置かれていました。しかし、今日の台湾社会では、漠然とした「親日」の雰囲気広がっています。このような現象をみなさんはどう思いますか」は、この節で考えるのは難しい。解放後に長い間戒厳令下に置いた蒋介石政権の問題や現在の中国の台湾政策への批判などさまざまな問題を考える必要があるからである。「漠然とした」親日の雰囲気かどうかも含めて考えるべきだろう。

*58 ページの資料④に関して、日本人児童は「制服」を着ているが、台湾人の子どもたちは「裸足」だ

という指摘は、比較になっていない。さらに、57 ページに「台湾総督府による台湾の工業化は、……植民地の発展を歪めました」とあるが、「歪んでいない植民地の発展」があるかのようだ。

1-2-4 「では、日本の朝鮮に対する植民地支配はいつから始まったのでしょうか」(p. 60)

* 問いとしては良い。

④「日本が朝鮮を支配しながら推進した憲兵警察統治や同化政策と、朝鮮人の独立精神とのあいだの根本的な違いは何でしょうか」とあるが、「根本的な違い」と「違い」はどう違うのか。さらに、「同化」という文言はあるものの、具体的にはどういうもののかの記述はない。同化は単に「日本人化」ではないところが理解するのが難しい点である。

* 土地調査事業によって「日本人の土地所有が大幅に増えました」(63 ページ)とあるが、朝鮮人大土地所有者についても触れるべき。

コラム「1900 年のパリ万国博覧会」(p. 68) は、図版がない。柴怡賛(中)

第 I 部第 3 章 民衆生活の変化

桜井千恵美

『歴史地理教育』12月号「新しい扉をひらく」「新未来をひらく歴史」大日方純夫

本書の特徴は「考える」⇒考えるための仕組み

全36節のタイトルは全て「～のか」 各節（3～4）も「～ のか」

・各節の末尾には読者の判断や見解を問うもの。自分の問題として考え、議論し続けることの重要性を提起する。

・本書の視点

1) 民衆、とくに女性・子どもの視点を大切にした

2) 対立・葛藤だけでなく、共同・和解の共通性に注目

●⇒節の問い ■⇒末尾の問い ★ 感想など

第3節を読んだ感想など

第3節は三国の民衆生活から見た内容で、三国の共通性と相互に影響を与えたと思った。特に学校制度、男女差別の記載に三国の共通性を感じた。「文明開化」＝「西洋化」であり、「近代化」は「西洋化」することであった。極東に位置する日本は中国・朝鮮に比べ、いち早く「近代化」した。排外主義と対中国への批判的報道が多い2025年現在から見ると、考えさせられる面があった。日清・日露戦争勝利を経て、中国・朝鮮、アジアへの優越意識を持った日本人の意識は、現在の国民意識の根底にあるように思う。中国・韓国の人々の視点からみれば、服装・髪型、造船・鉄道・電信などあらゆるものは、日本の植民地支配に関係し、それへの抵抗でもあったという一面もあった。

新聞世論調査、“高市政権の高い支持率と「台湾有事は関係ない」が50%を超えた”結果を見て、本の帯『「歴史対話」が東アジアの平和をつくる』が、今一番必要な事だと痛感する。中国はアヘン戦争以後を「100年の屈辱」とし、中国東北部の記念館で見た江沢民の言葉は、「弱かったから中国は攻められた。強くならなければならない」であった。

各節末尾の問いは「読者の判断や見解を問うもの。自分の問題として考え、議論し続けることの重要性を提起する。」とあるが、編集委員会としてどう考えているのだろうか、とも思った。

第1節 スーツと散髪はいつから始まったのか

●開港以後の日常生活の西洋化の三国の変化や意味にはどのような違いが見られるか

1. 「散髪」はどのような意味を持ったのか

①「散髪」は「文明開化」の象徴⇒日本「散切り頭を叩いてみれば文明開化の音がする」

、朝鮮では1895年の「断髪令」に民衆が抵抗。「まげ」を守ることが文明開化と日本侵略への抵抗。中国では辮髪を切ることが清朝への抵抗であり、新中国建設への政治的宣言。

2. スーツはどのように導入されたのか

①西洋式軍隊の導入から始まり、「制服」となって広がる。「断髪」と「スーツ」が男性の社会的地位を示す。

3. 西洋化は女性の日常をどのように変えたのか

①中国では「纏足」の廃止に繋がるが、農村部では1930年代まで実施。

★男性ほどの変化はなかったのではないかな？

4. 西洋化は日常の食べ物をどのように変えたのか

①「富国強兵」の軍隊の食事から西洋化が進む。⇒日本では「肉食」が文明開化の象徴

②華僑の役割⇒日本・朝鮮に中国人が労働力として進出。「チャイナタウン」が生まれる。

中国料理は、長崎では「ちゃんぽん」が生まれ、朝鮮では「ジャージャー麺」が生まれる。

★中華料理の世界的広がりは、現代にも繋がっている。

■ 各国の西洋化の努力とともに、互いに対する歪んだ見方が根深くなった。特に日清戦争後の日本で

は、中国と朝鮮の服装や食べ物を近代化できなかった象徴とみなす意識が強くなった。

★「中国・朝鮮の服装や食べ物が近代化できなかった象徴」で「日常文化のなかで抱くようになった偏見」とは何か。中国・朝鮮、アジアへの優越感は、日清・日露戦争の勝利によって生まれたのではないか。日本の植民地支配下の朝鮮及び「満洲国」では、日本人居住地と朝鮮人居住地のインフラ格差は激しかった。末尾の問いに違和感を覚えた。

第2節 新たな交通手段と電信は民衆にどのような変化をもたらしたのか

●蒸気船は東アジアにどんな変化を与えたか、人々の日常生活にどんな変化を与えたか

1. 外輪式蒸気船はどのように東西間の旅行時間を短縮させたのか

「蒸気船の出現は、人や商品の交流を促進、新知識の伝搬を促す。欧米の新聞を読むことで、東アジアの人々の目を世界に開かせた。」

2. なぜ鉄道は文明開化の象徴になったのか

①鉄道の「巨大な運輸力」は工業化時代のシンボル。三国の民衆は鉄道を受け入れる。

②鉄道の敷設権をめぐる植民地化が進む。中国・朝鮮は敷設権を欧米・日本に奪われる。

③鉄道の社会的影響⇒鉄道は文明化の象徴であり、教育や文化交流の機能を持つ

3. 世界が繋がっているという想像を電信はどのように促進させたのか

①1860年代に欧米列強は電信線敷設を要求。電信は世界の一体化・グローバル化を促す。

■新たな交通手段・津新手段は時間と空間を大きく短縮させた。当時の民衆の生活と意識をどう変えたか。同時にこれらは、植民地侵略に伴って東アジアに侵入。人とモノが国境を超えて移動し、情報が伝搬すると文化的な交流にも新たな局面を出現させた。

第3節 家族や両性関係はどのように変化したのか—あなたの由来

●中国と韓国、日本の姓の呼称が異なる背景と家族の歴史をたどる

1. 近代以前、三国の人々は恋愛結婚をしていたのだろうか

①三国とも家父長権が強い、それを支えたものは儒教道徳、男尊女卑の傾向

2. 社会改革を求めた男性たちは、女性の抑圧に対してどんな試みをしたのか

①日本は福沢諭吉、中国は纏足批判。限界あり。

3. 女性たちは自分たちへの差別をどうしようと考えたか

①中国は胡適、朝鮮は金一葉、日本は平塚らいてふの実例で運動を示す。

4. 国家が期待する女らしさ、男らしさに人々は満足したのか

①国民国家に未来の国民づくりは重要⇒日本は良妻賢母、朝鮮は賢母良妻、中国は良母賢妻

■「恋愛することがどんなに大変なことだったか、夫と妻は一人ひとりという考えも確立できなかったのはなぜか、考えましょう。みなさんはどんな家族、どんな人間関係をつくりたいですか。

⇒★難しい問い？ 女性差別は三国共通であり、戦後の男女平等を求める運動で権利を拡大

第4節 学校の登場で子どもたちは何をどのように学ぶようになったのか

●「学校」という教育機関の登場で子どもたちの学習風景や学習内容はどのように変化していったか

1. 子どもたちの学ぶ場所はどのように変化したのか

①近代化以前—日本・寺子屋、朝鮮・書堂、中国・私塾⇒中国・朝鮮は科挙試験受験の教育機関

②「学校」導入—日本、1872年学制、朝鮮、甲午改革 1874年、中国、奏定学堂章程公布、1904年・学校—身分・男女の差なく、一定年齢で教育を受けさせる機関、実際は男女差・経済格差。女子教育は家庭で行う。朝鮮は官立学校が少なく私立学校が多い。教育救国運動の面あり。

中国は1904年に科挙制度廃止

2. 学校の登場によって、子どもたちの学習内容はどのように変化したのか

①寺子屋・書堂・私塾は、読み書きそろばん。 ②近代学校⇒「修身」（道徳）

③国家が学ばせたもの⇒日本、教育勅語⇒教科書検定制度⇒国定教科書。朝鮮⇒日帝強占期は日語（日本語）メイン

3. 国家は学校による教育で、どのような子どもたちをつくろうとしたのか

①近代化の要としての学校と教育を通した国民づくり

②君主・国に奉仕する臣民づくり。朝鮮・中国は日本の教育勅語の影響

■国は学校という教育手段で子どもたちに忠君愛国を思想的、身体的に浸透させることが国造りの課題に最も適した方法と考え実践。このような学校教育制度は、三国でこれ以降もそのまま発展していくのでしょうか。三国の子どもたちは、その後も継続して学校で一律に教育を受け、それぞれの国が望むような国民になっていくのでしょうか。

コラム 三国それぞれで異なる新年元日

- ・太陰暦から太陽暦へ⇒日本 1872 年、朝鮮、日清戦争後の 1896 年、中国は辛亥革命後の 1912 年
民衆は太陰暦を使用（現在に繋がる、中国の新年「春節」、韓国「ソルラル」、日本のお盆 8 月）

コラム 写真の登場と民衆の生活

- ・開港地の写真館から広がるが、民衆は写真に脅威を感じる
- ・記念写真から民衆は写真を受け入れる
- ・写真を対内的には互いに同じであること、対外的には異なることを認識させる

コラム 学校体育の展開

- ・東アジアの伝統教育—日本、武士の修養を学ぶ。中国・朝鮮は人文学的知識と道德教育
- ・近代教育—日本、1872 年学制公布。中国、ミッションスクールの影響。朝鮮は日帝支配下の教育

第Ⅱ部「ふたつの世界大戦と東アジア」

第 1 章「第一次世界大戦以後の東アジア」

木村誠

1. 第 1 章の構成

- 第 1 節 第一次大戦の東アジアへの波及を民衆はどう受け止めたのか（執筆：日本・笠原十九司）
第 2 節 東アジアの民衆はどのようにロシア革命を認識したのか（執筆：中国・高瑩瑩）
 コラム：アジアの米騒動（執筆：日本・笠原十九司）
第 3 節 3・1 運動と 5・4 運動が夢見た世の中は何だったのか（執筆：韓国・金志勲）
 コラム：東アジアから見た関東大震災（執筆：韓国・裴姍美）
第 4 節 「不戦」の取組みにもかかわらず、なぜそれは破綻したのか（執筆：日本・松本武祝）
 コラム：第一次世界大戦に動員されたアジアとアフリカの民衆（執筆：中国・高瑩瑩）

「民衆はどう受け止めたのか」「民衆はどう認識したのか」「夢見た世の中は」と「民衆」を表に出し、民衆の視角からの記述をめざしている。それは成功しているだろうか。

2. 内容検討

(1) 第 1 節 第一次大戦の東アジアへの波及を民衆はどう受け止めたのか

1) 日本が第一次世界大戦に参戦した理由は何か

第一次世界大戦の勃発→井上馨「大正新時代の天祐」と言って参戦を促した。

対独最後通牒 (1)イギリスからの要請に応え、青島の軍艦、武装商船の活動阻止

(2) ドイツの山東権益を中国へ返還するため

しかし、イギリスはあまりに性急な日本の参戦決定に、要請をいったん取り消し参戦見合わせよう伝えてきた。

2) 日本の民衆はドイツに敵意を持っていたのだろうか

青島の要塞攻撃 日本約 5 万人（約 3 倍の死者・負傷者）

ドイツ守備兵 5000 人余り（死者 170 人 負傷者約 500 人）

捕虜 4461 人 日本の四国地方の捕虜収容所へ

現地住民は歓迎 酪農 トマト栽培法を学び 交響楽団演奏

青島で戦闘を行い、多くの死傷者が出ていることは、これまであまり知られていなかったと思う。ドイツ軍捕虜は、すべてが四国地方の捕虜収容所に収容されたわけではない。当時、収容所は全国 16 カ所あったのではない。広島に似島にも 500 人規模の収容所があり、捕虜たちは広島高師の学生とサッカー試合で交流をしている。また、ドイツ菓子ユーハイムは、この収容所の捕虜が興した会社である。徳島県の板東捕虜収容所は最大規模で、捕虜たちの自主的な活動を保障したことで有名だが、各地で日本の民衆との交流があったことを書いた方が執筆趣旨に合っているのではないだろうか。

3) 二十一か条要求に対して中国民衆はどのように対抗したのか

ドイツの山東権益の獲得へ 袁世凱総統に日本政府は 1915 年 5 月 7 日に最後通牒

5 月 9 日受諾。→新聞は 7 日と 9 日を「国恥記念日」とすることを提唱

民衆側 日本商品ボイコット（日貨排斥）、国産品の奨励と愛用運動（国貨提唱運動）

仁丹に対抗し良丹（「民族産業の黄金時代」 軽工業の発達）

4) 第一次世界大戦に朝鮮民衆はどうかかわったのか

・ロシア軍に雇われてヨーロッパ戦線に送られた朝鮮人 1919 年 10 月 500 人の朝鮮人労働者がロシア北端ムルマンスク→イギリスへ→帰国

- ・大戦以前にアメリカへ渡った黄玼煥 米軍に志願入隊しヨーロッパ戦線へ戦後ヨーロッパに残り、パリ講和会議で大韓民国臨時政府駐パリ委員部書記長
 - ・中国軍、ロシア軍の兵士として戦闘に加わった者もいる。
- しかし、大多数の朝鮮人にとって世界大戦は他人事

500 人もの朝鮮人労働者がヨーロッパ戦線に送られた事実は知らなかったことなので、新鮮であるが、どのような経緯か、送りだした主体は誰なのか、労働者はどこで何をしていたのかがわからない。「ロシア軍、中国軍として戦闘に参加した朝鮮人も多くいます」も具体的な経緯や事実が出ていないので、どう捉えたら良いのかわからない。

- 5) 中国の第一次世界大戦参戦は中国民衆の意識をどう変化させたのか
 第一次世界大戦に参戦（1917 年 3 月対独国交断絶宣言。4 月宣戦布告） アメリカの要請
 中国の参戦は中国の大衆社会における「ヨーロッパ化」をもたらすきっかけとなった
- ・「参戦華工」（軍夫＝陣地構築、道路構築）
 - ・「留仏勤工儉学」運動（鄧小平 周恩来＝フランスで共産主義を学ぶ）

「参戦華工」、「留仏勤工儉学」運動の記述は興味深い。鄧小平 周恩来がフランスで共産主義を学んだことは知っていたが、中国が第一次世界大戦で労働者を送り込んでいた事実は知らなかった。しかし、「中国の大衆社会におけるヨーロッパ化をもたらした」の中身が具体的でない。鄧小平と周恩来の例だけでは伝わらない。

（2）第 2 節 東アジアの民衆はどのようにロシア革命を認識したのか

- 1) 十月革命後、中国・朝鮮・日本はそれぞれどう反応したのか
 全ロシアソヴィエト大会「土地に関する布告」・「平和に関する布告」を採択し宣言。
 （他国の領土、国民を併合しない。賠償金を取らない。弱小民族の自決権破壊の違法性宣言）
 →中国 中国の政治の動揺を恐れる声 独口講和を阻止して辺境の秩序維持 華僑の安全
 →日本 中国に対して軍事同盟の締結を提起 ドイツ軍の東部侵攻を憂慮
 ＝1918 年「日中共同防敵軍事協定」
 ・ロシア領極東地域に居住する朝鮮人が組織する抗日運動組織があったが、十月革命後 12 月に極東人民委員会を成立させ社会主義者が参加→1918 年 5 月「韓人社会党」創設
- 3・1 運動以後、上海の大韓民国臨時政府に合流
 ・日本 民主主義運動家は「二月革命は民主主義が専制国家ロシアに勝利」と高く評価
 しかし、十月革命以後評価は分かれる。ボルシェビキを評価するかどうかによって、マルクス主義派、無政府主義派に分裂。
- 2) 日本は「シベリア出兵」を通じて中国・朝鮮の民衆運動をどう鎮圧したのか
 田中義一「朝鮮と中国の民族主義運動は共産主義思想の影響を強く受けており、革命軍の進出は朝鮮と満州に脅威を生み出している、それに対して敵対的な態度をとる必要あり」
 ニコラエフスク事件→これを口実にサハリン北部を占領、沿海州南部に軍を駐屯させた。
 1920 年 10 月 日本軍が裏で策動し琿春事件を起こし、抗日武装勢力を包囲殺害
- 3) ロシア革命後、東アジアの民衆運動はどう発展したのか
 ロシア十月革命は東アジアの民衆運動に影響を与えた（労働運動の高潮と共産党の組織化）
 日本—ストライキの数、参加者の増加、米騒動以後の労働組合の出現。
 社会主義の影響は大學にも 東京大学新人会、早稲田大学建設者同盟
 朝鮮—1920 年 4 月に朝鮮労働共済会結成（民族解放と階級解放を宣言）
 1924 年朝鮮労働総同盟（社会主義の色彩を強めた）
 中国—李大釗 中国で最初にマルクス主義を広めた。思想界に大きな衝撃を与えた。
 中国社会の構造変化 大戦中民族資本工業の発展→工場労働者が台頭
 1921 年 7 月中国共産党成立 1922 年 コミンテルンへの加入決定

(3) 第3節 3・1運動と5・4運動が夢見た世の中は何だったのか

1) 植民地朝鮮でなぜ3・1運動が起きたのか

1919年初め、パリ講和会議 ウィルソン米大統領の民族自決主義が世界各国へ伝播

1919年3月1日、京城、平城、義州、元山、などで万歳示威

学生、聖職者、農民、労働者など各界各層にひろがった。

一般民衆はどのように3・1運動を記憶したのでしょうか

鄭錫海、柳寛順が例として取り上げられているが、「どのように記憶した」という内容ではない。なぜこの二人を取り上げたのだろうか。

3・1運動を契機として、大韓民国臨時政府の樹立、独立軍の活動活発化

20世紀の反帝国主義運動の重要な道しるべとなった。

2) 中国で5・4運動はどのように展開されたのか

戦勝国としてドイツの山東利権の回収を期待したが、パリ講和会議で日本が継承することに

北京の学生が1919年5月4日に集会 北京政府の外交長官の家に押しかけ放火、小競り合い 全国的に大きな反響を起こした。(同盟休校、ストライキ、日本製品不買運動)

3) 外国人は3・1運動と5・4運動をどのように見たのか

朝鮮総督府機関誌『毎日申報』 破壊行為を起こした騒擾

『ニューヨークタイムズ』

「独立宣言書」掲載 「東アジアで発生した最大の事件」

日本の新聞

3・1運動 「暴動」 「騒乱」 「不穏文書」

5・4運動 「米英のスパイが扇動」 「政治家の野心」

「過激派が扇動」「学生匪賊」

吉野作造 中国の排日感情は日本の官僚制と軍国主義に向けたもの

第一次世界大戦以後、帝国主義列強が主導した世界秩序に抵抗した民族運動として、インドやエジプト、ベトナムなどで起こった被抑圧民族の抵抗運動とともに世界史的な意味を持っている。

韓国の三・一節と中国の青年節は現在の私たちにとってどのような意味があるのでしょうか。

(4) 第4節 「不戦」の取組みにもかかわらず、なぜそれは破綻したのか

1) 「戦争違法化」の潮流はどのようにして生まれて来たのか

1920年設立の国際連盟は「戦争の違法化」を理念に掲げて集団安全保障に基づく平和維持をめざした。

アメリカは加盟せず。アメリカの呼びかけでワシントン会議が開催(海軍軍縮問題討議)

「中国に関する九国条約」(米英中仏伊日など)

・中国の領土、政治的な保全が確認された

・日本は山東省の旧ドイツ権益を中国に返還×不平等条約、租借地返還などは先送り

中国国民党は1924年に第一次国共合作 26年には北伐開始し中国統一を目指す。

国権回復運動を主導

アメリカは不戦条約を提起 1928年に「戦争放棄に関する条約」(パリ不戦条約)

侵略戦争を明確に「違法」なものと規定、しかし、それ以前の侵略戦争およびその結果としての植民地支配に関する違法性は論じられず。

2) 東アジアの反戦運動はどのような課題に直面したのか

パリ講和会議は「民族自決」の理念にもかかわらず、植民地での「民族自決」を棚上げした。

・新韓青年党 朝鮮独立の請願書を提出したが列強はそれを無視

加盟国相互の「領土保全」の「領土」には、その国が領有する植民地が含まれると解釈

・3・1独立運動 「独立宣言」には「朝鮮独立」を通じてこそ東アジアの平和が実現されるという展望が明確に示されている。

・朝鮮、台湾、中国大陆での民族解放闘争の進展にともなって植民地の解放と中国の国権回復こそが

東アジアの平和構築にとっての必須条件という認識が広がった。

日本政府はこの状況に軍事力で対抗した 北伐に対し3次の武力干渉（山東出兵）

・日本の無産者政党・団体 1927年に対支非干渉同盟を設立し政府の中国派兵を批判

当局の弾圧で解散後、1929年に国際反帝同盟日本支部として発足し、朝鮮、台湾、中国における民族解放武装闘争を支持

・中国 蒋介石の4・12クーデター（1927年）で第一次国共合作が瓦解 日本に融和的外交

宋慶齡 上海反戦会議を開催 「戦争違法化」の国際世論と民族解放武装闘争

3) 日本政府は「反戦」の潮流に逆らって何をしたのか

日本軍部は第一次世界大戦から「不戦」を教訓として得ることはなかった。

1918年に軍需工業動員法を成立させ、総力戦に備えた。

1925年から陸軍軍備縮小計画を実施 常備師団を削減し、軍装備の近代化を図った。

同時に中学以上の官公立学校で軍事教練が正課になり、将校が配属に

第Ⅱ部「第2章 東アジアの総力戦と民衆の抵抗」

平野昇

1. 各節の構成と執筆者

第1節	日本はなぜ継続して対外戦争を拡大したのか	(韓: 河棕文)
第2節	戦時中、徴兵はどのように行われたのか	(中: 馬曉娟)
第3節	女性にどんな暴力が振るわれたのか 一戦時性暴力	(日: 笠原十九司)
第4節	三国の民衆は共同で日本の侵略戦争にどのように対抗したのか	(中: 徐志民)
column	反戦平和をうたう	(日: 笠原十九司)
column	日中朝が複雑に絡み合った万宝山事件	(韓: 尹輝鐸)

2. 各節の概要と私の意見

(1) 第1節 日本はなぜ継続して対外戦争を拡大したのか

最初の項の問い「戦争の兆候はどこに見つけられるのか」では、義和団戦争後の支那駐屯軍と関東軍の存在を述べ、それらの軍隊が張作霖爆死事件を引き起こしたこと、その事実は日本国民には知らされていなかったことを述べている。

文中で、張学良が「反日に転じ、国民政府に合流し、日本の満州進出に対抗しました。これが満州事変の原因になりました」とある。張学良のこの行動が満州事変の原因なのか。この事件から3年後の満州事変に至るまでの経過を見ると満州事変の原因は複合的ではないか。

2番目の項の問い「満州事変はなぜ防ぐことができなかったのか」では、関東軍参謀が柳条湖での鉄道線爆破を計画して実行したこと、これは軍令違反なのに軍上層部や日本政府が追認したことを述べている。つづいて国民政府の対応を述べ、リットン調査団の派遣、日本の国際連盟脱退などを述べている。そして、日本国民が熱狂したことや軍人などによるクーデターやテロについても言及している。

3番目の項の問い「日中戦争はなぜ早期に收拾させることができなかったのか」では、盧溝橋事件から記述が始まり、現地軍では停戦協定が調印されたのにもかかわらず日本軍上層部は派兵を決め支那駐屯軍に戦闘を行う指示を出し、蒋介石も抗戦も辞さないという演説をしたことによって、戦争が上海にも広がったと記述されている。

7月7日の夜に起こったのは「偶発的小衝突」である¹。この項の冒頭の文章「1937年7月7日、北京郊外にある盧溝橋で、日中両軍が激突しました」は誤りであろう。この記述では、この日から日中両国間で本格的な戦闘が始まったように誤解されてしまう。7月7日夜には、両軍とも銃撃し合ったがすぐに停止し、負傷者も死者も出ていないし、11日には現地軍の間で停戦協議が成立した。それにもかかわらず、北京付近で日本軍の総攻撃が始まったのは7月28日である。本書に記述されているように、現地の両軍は停戦協定を結ぶなど戦闘の拡大を阻止しようとしていたが、日本軍上層部からの戦争拡大の方針や国民政府の対応によって日中戦争に広がったというべきではないか。

前項では「満州事変はなぜ防ぐことができなかったのか」という問いが立てられているが、盧溝橋事件の時点では日中戦争をふせぐことができる可能性があったとも言えるのだから、この日から激突したという記述は不正確ではないだろうか。

4番目の項の問い「アジア太平洋戦争を防ぐ方法はなかったのか」では、前半は「アジア太平洋戦争徴発の主犯は東条英機なののでしょうか」と書き始められ、後半では昭和天皇の戦争責任についても言及している。

(2) 第2節 戦時中、徴兵はどのように行われたのか

1番目の問い「日本はどのように兵力を動員したのか」では、まず日本の徴兵制度の変遷と、アジア太平洋戦争末期の学徒動員や沖縄での根こそぎ動員について述べている。また、日本国民が進んで入隊した理由になった思想教育や恩給制度についても述べている。

2番目の問い「日本はどのように植民地の人びとを動員・徴兵したのか」では、朝鮮と台湾それぞれの

徴兵の変遷について記述している。

この前の問いの部分で恩給制度の記述があるが、敗戦後、朝鮮と台湾の元兵士には恩給が支給されなかった、そして、今でも未解決の問題になっていることについても記述してほしい。

3 番目の問い「中国はどのように徴兵を行ったのか」では、まず中国国民党軍について述べ、次いで中国共産党軍の徴兵の仕組みが述べられている。また、積極的に軍隊へ志願していった青少年や知識人青年の国民党軍参加の動きが述べられ、最後は「もし再度、戦争が勃発したら、あなたはどのような選択をするか、考えてみましょう」と結んでいる。

（3）第3節 女性にどんな暴力が振るわれたのか ―戦時性暴力―

この節は「本書の大きな特徴は（中略）民衆に目を注ぎ、特に女性への視線、子どもへの視線を大切にしていることにある」ⁱⁱという執筆メンバーの意図が具体的に書かれている部分である。

第1の問い「日本の総力戦体制において女性はどうような役割を担わされたか」では、日中戦争以降の日本女性が社会から求められていた女性像（出征した男性に代わって各種の労働に従事すること、子どもを産む道具）を説明し、どの母親も軍国歌謡『軍国の母』のように思っていたのだろうかを文をまとめ

ている。

第2の問い「中国で日本軍はなぜ性暴力を犯したのか」では、中国で行われた戦犯裁判での竹内豊の供述書を資料として掲載し、「慰安所は国家と軍による組織的な性的暴力施設に他なりません」と書いている。問いに応えるような本文になっていないと感じた。

第3項は問いではない（なぜか？）「日本軍『慰安婦』にされた朝鮮人女性の生涯」では、生還した朴永心さんの体験を記述して、慰安婦とされた女性がどのように体験をしたのかを具体的に書いている。

第4の問い「日本軍の慰安所制度はどうなっていたのか―日本政府の調査より」では、日本政府が1993年に発表した調査結果を、1ページを割いて掲載している。

（4）第4節 三国の民衆は共同で日本の侵略戦争にどのように対抗したのか

第1の問い「中国と朝鮮の民衆はどのように連合して日本の侵略戦争に抵抗したのか」では、まず中国東北部での朝鮮人・中国人の抗日義勇軍が楊靖宇率いる東北抗日連軍に改編されたと述べている。つづいて大韓民国臨時政府の活動を記述し、中国と協力し合ったことが書かれている。

第2の問い「中国と日本の民衆はどのように日本の侵略戦争に連帯して抵抗したのか」では、まず長谷川テルを紹介している。次に反戦兵士の名前をあげ、在華日本人反戦同盟の活動を紹介している。

第3の問い「日本人はなぜ、抗日戦争に身を投じたのか」では、戦争がつづくにつれ日本人の間に厭戦・反戦の感情を抱く者も出てきたと述べ、日本軍兵士秋山良輝の活動を紹介している。

第4の問い「日中朝三国の民衆の抗日戦争をどのように認識するのか」では、実際には日本軍・警察の弾圧が激しく、民衆の抗日闘争は進まなかったことを述べ、次に各国内での民衆の対立的な意識・行動があったことを書き、最後に『売国』や『愛国』が立場によって異なるのをどう理解すべきでしょうか、そこには、今日の東アジアの平和と協力に対して、どのような教訓があるのでしょうか」と問題を提示してまとめている。

3. 執筆者が立てた「問い」と記述が照応しているか ―本章第1節を例にして考える―

本書の「まえがき」には、「この第3冊目の教材の最大の特徴は、すべての章節に問いを置く形式に」していることだと書かれている。

また、本書の編纂委員である大日方純夫さんは、別の論考で以下のように書いている。「全36節のタイトルは全て『～のか』各節も3～4の『～のか』という項からなる。問いを通じて過去に迫り、さまざまな事実を通して考えてほしいからである」ⁱⁱⁱとし、『問い』には3つのパターンがある。一つは、歴史的事実に関する具体的な問いであり（中略）読者は本文を読みながら答えを探る。二つ目は主に各節のまとめにある歴史の構造に関する大きな問いで、すぐには答えが出せない。（三つ目は：平野）各節の末尾には読者の判断や見解を問うものもある。答えは一つとは限らない。」^{iv}

本章第1節全体の問いは「日本はなぜ継続して対外戦争を拡大したのか」である。この節では、日本が満州事変から日中戦争、アジア太平洋戦争へと戦争を拡大継続した理由を問うてしていると理解した。

第1項の問いは「戦争の兆候はどこに見つけられるか」だが、やや意味がはっきりつかめない。どんなできごとに戦争の兆候が見られるのか、探してみようと言う意味だろうか。以下の記述内容は1ページで要約したが、この記述から「戦争の兆候」と断言できる事件を見つけることは難しい。義和団戦争の結果、支那駐屯軍が置かれたことを指すのだろうか、それとも張作霖爆死事件を引き起こしたことを指すのだろうか。この問いは前述の大日方さんの分類に従えば「歴史的事実に関する具体的な問いであり（中略）読者は本文を読みながら答えを探る」作業をする部分だろうが、正答を探すのがむずかしかった。

第4項の問いは「アジア・太平洋戦争を防ぐ方法はなかったのか」となっている。これは、大日方さんが言うところの「読者の判断や見解を問うものもある。答えは一つとは限らない」問いだろう。ここでは、東条英機が首相だった時期の日本の戦争拡大の経過を記述し、最後に「日本の為政者にとって、アジア・太平洋戦争への突入は不可避でした」と述べている。ならば、この問いへの解答は「不可避でした」ということなのか。なお、この項の最後の文章は、「果たして昭和天皇には開戦に関する責任がないのでしょうか。そして、日本の戦争責任問題はどのように処理されたのでしょうか」とまとめている。戦争は防げなかったのかと最初に問うているのに、最後は戦争責任の問題が提起されている。項の最初の問いとその後の記述が照応していないのではないか。

最後に私の意見を書けば、このようなほとんど全ての章や節・項の最初に問いを置く記述のスタイルは成功していないのではないかなと思う。まず、問い自体が何を問うているのかよくわからないことがある。また、本文が最初に掲げた問いに照応していないこともある。私は、史実や根拠となる資料を提示して読者が一定の知識を得るような記述をして、その後に問題を提起するという方が自然な記述になるのではないかなと思われる項があるのではないかなと思った。「第2節 戦時中、徴兵はどのように行われたのか」かでは、各国の徴兵制を説明した後、「もし再度、戦争が勃発したら、あなたはどのような選択をするか、考えてみましょう」と結んでいる。このような記述のスタイルの方がよいではないかと感じた。

4. 女性は受け身な存在、被害者としてしか描かれていない

「第3節 女性にどんな暴力が振るわれたのか 一戦時性暴力」では、戦時性暴力は現代の課題でもあるという趣旨の問題提起が1ページ弱記述され、次に日本女性について約1ページが割かれている。その後の4ページはすべて慰安婦問題の記述である。最初に書かれている日本女性についての記述の内容は、（ごく簡単にまとめれば）出征した男性に代わって各産業で働くことと子どもをたくさん産むことが求められていたと書かれている。つまり、この戦争期、女性は男から命じられた役割分担を果たした受け身の存在だとしか描かれていないことになる。

私は、日中戦争からアジア太平洋戦争の時期の東アジアの女性たちは、ただ単に男が引き起こし拡大していった侵略戦争の被害者だったという書き方では不十分ではないかなと考える。

まず、日本女性が積極的に戦争にかかわってきたという側面も記述しなければならないだろう。例えば国防婦人会の活動がある。女性たちは銃後の活動に総動員されたとも言えるが、それは一般の主婦にも社会活動の場を提供したとも言えるし、女性たちにとっては一種の解放だったという考えもある。⁹何よりも国防婦人会は女性の積極的な参加であれだけの広がりを持つことになり、旧来からあった愛国婦人会を上回る活動をするようになったのは事実である。また、勤労働員とは言え工場などでの労働に参加した若い女性たちは、学校や家庭とは違う場で働き社会に目を向けるようになった体験だとも言われている。

総力戦になったことにより女性も銃後での戦争参加を強制されたというのはその通りだが、その活動に積極的に参加した女性たちがいて、その経験が戦後日本の社会生活に影響を与えていったという側面も確かにあると考える。

さらには、日本女性にも加害責任があったという考え方も提唱されて久しい。決して個人を糾弾するわけではないが、林芙美子など積極的に軍部に協力した女性文化人、婦人の権利獲得につながると考えて大政翼賛会体制下の団体で活動した市川房枝などの例なども、戦争を起こした国の中での女性たちの主

体的な戦争協力としてとらえるべきではないだろうか。^{vi}

くり返しになるが、この戦争期の女性を単に被害者、受動的な存在という側面だけを書くのではなく、たとえ総力戦への動員という条件下であれ、女性が主体的に戦争にかかわってそれまでの彼女らの社会生活とは違った体験をし、新たな社会認識を獲得していった側面も記述してほしい。

その意味で、第2節の徴兵制の箇所、中国での女性兵士のことが書かれていないことが惜しまれる。中国の女性兵士はどのような思いで兵士となったのか、その経験がその後の生き方にどう関わっていったかも知りたいものである。

5. column 記述についての意見

(1)「平和をうたう」というテーマの設定がとてもよいと感じた。音楽や文学作品からそれぞれの国での抵抗、反戦の様相が具体的に浮かび上がってくると思う。ただ、残念な記述もある。

①記述量のバランスが取れていない

150 字と 151 字を見比べると文字のポイント数が違い、明らかに総文字数が違っていて、編集が統一されていない印象である。一見して、聶耳については詳しく記述しているが、鶴彬については生涯を簡単に紹介しただけのように感じる。

②聶耳^{ニエアル}の文章には肝心なことが書かれていないのが残念。

それは、1935 年に国民政府支配下の上海でつくられた、それも映画の主題歌だった「義勇軍進行曲」という歌がなぜ中国国歌になったかということが書かれていないということである。この文章では、中国国歌になったのは作詞者の田漢が新中国の幹部だったからのように書かれているだけである。また、このページにはこの曲の歌詞しか掲載されていない。聶耳の自筆楽譜があるから、歌詞ではなく楽譜にすべきだと思う。

石川禎浩は、「この主題歌は、その躍動的なメロディーと救国を訴える歌詞によって爆発的に流行した(中略)これら 1930 年代の中国で登場した流行歌(「義勇軍進行曲」・「松花江のほとり」：平野)が示唆するのは、日本の侵略に直面した民族的危機感とそれに呼応するナショナリズムが、中国にとっての国民意識の基盤だったということになるであろう」と述べている。^{vii}

また、久保亨は、1936 年の西安事件の際、民衆集会でこの歌が「高らかに歌われていた」というアグネス・スモドレーの証言を紹介しながら、「(この歌は：平野)1937 年に日中全面戦争が勃発してから、いっそう多くの人々の間に広まっていく。映画『嵐の中の若者たち』はしだいに忘れられていったのにもかかわらず、その挿入歌『義勇軍進行曲』は、中国の民族意識を形成した抗日統一の記憶を象徴する存在になった」と述べている。^{viii}

私はこれらの記述から学んだのだが、軽やかな行進曲風のメロディーと抗日を訴える歌詞が抗戦期の中国民衆に支持されたのだと思う。なぜこの歌が中国民衆の間で流行したのかという視点からの記述が本書にもあればよかったと感じた。

③鶴彬についてもっと知りたい

彼は、column に登場する他の 2 名と違って知識人でもないし、高等教育も受けていない庶民である。



そういう人物が人生でどのような経験から社会主義者・反戦主義者になっただけなのか、なぜ川柳という表現を選択したのか、彼の生涯をもっと詳しく紹介してほしい。

(2) 「日中朝が複雑に絡み合った万宝山事件」の記述について

全体として、どんな事件なのかよくわからない文章だと感じた。有名ではない史実なので初めてこの事件名を知る読者も多いと思う。どこでどんなことが起こったのかという基本的な事実関係をはっきり記述する必要があると思うのだが、本記述は事実を書きながらもこの事件の背景や筆者の見解がはさまれていて、事件の全体的な理解が難しい。

「中国人は、満州に住む朝鮮人を『日本の手先』として差別しました」と中国人が朝鮮人を差別したように記述しているのは適切ではないだろう。中国人農民と朝鮮人農民の利害が対立したことから起こったこの衝突は、朝鮮人が日本側の支援を受けて自分たちの耕作地の水利工事を行おうとして起きた事件である。この衝突は、中国人が朝鮮人を差別していたから起きた事件ではなく、日本は朝鮮人を集団移住させ中国人の土地を奪ったり、このような行為を行なわせたりしたため、朝鮮民衆と中国民衆が対立させられたととらえるべきではないだろうか。この朝鮮人の入植そのものが、長春総領事などの強い支援のもとで行われ、日本権益進出の橋頭堡としての意味をもたされていたという。^{ix}

また、この衝突について朝鮮日報が朝鮮人殺害という誤報を掲載したことによって、朝鮮内で中国人排斥運動が起こり多数の中国人が殺害された理由を説明している部分もわかりづらい表現である。

「満州」の朝鮮人は、日本の政策による被害者でもあったが、中国民衆にとっては加害者という側面もあったとはっきり書くべきではないだろうか。日本の政策に起因して中国と朝鮮の民衆が対立させられていたために日朝の民衆同士が対立して殺戮が引き起こされたと考えるのだが、どうだろうか。

6. いくつかの不正確な記述

①13・1 ㊦ 「1942 年度の小学校国語教科書には（中略）『爆弾三勇士』の話が載せられました。」

→正しくは、「国民学校国語科教科書と唱歌教材」に。

②133 ㊦ 日本の徴兵制度の説明についての「甲種は現役として最初に戦場に送られました」は、やや不正確ではないか。この表現だと、甲種合格者は全員戦場に送られるように読める。

平時には、甲種合格者のうちの一部が入隊して現役兵となっていた。甲種合格者の全員ではなく一部が、軍隊の所在地で訓練を受けながら一定期間兵としての生活を送ることになる。平時は、定員より多く甲種合格者が出るので、多くの若者は補充兵となり、軍隊外で今までの自分の仕事を続けることができた。戦争が始まり、現役兵だけでは戦力が足りなくなった場合は、補充兵である甲種合格者から動員が始まるのである。このような徴兵システムが平時から用意されていたのが日本だったということを記述してほしい。

③「ひめゆり部隊」ではなく「ひめゆり学徒隊」に

「部隊」とは、軍隊編成上の組織を指す語である。「ひめゆり部隊」と書くと、女子学生がそのような軍事組織に組み入れられ戦闘に加わったという誤った認識を抱かせる可能性がある。本文にあるように、「ひめゆり学徒隊」が行ったのは病院の看護補助の仕事で、戦闘に参加したわけではない。

動員された学生を指す言葉は、学徒隊である。当時沖縄の各種中等教育学校の生徒は、男子の通う 9 校が学校ごとに学徒隊に組織され、女子は 7 校がそれぞれの学校を単位に組織された。女子の学徒隊は学校ごとに呼び名が付けられたが、「ひめゆり学徒隊」はそのうちのひとつである。^x

また、「男子学生は戦闘の主力として『鉄血勤皇隊』や…」の下線部分も問題があるのではないか。

7. 細かなことで

・126 ㊦ 「義和団事件」→「義和団戦争」の方がよいのではないか。

・column 反戦平和をうたう （韓国） 李陸史

彼の作品「広野」が掲載されている。彼の詩は朝鮮語で書かれているのだから、ここでは訳文の出典名ではなく翻訳した人の名前を書くべきだと思う（たぶん、金正勲）。

・column 日中朝が複雑に絡み合った万宝山事件

←219 ㊦の教材委員会名簿では「日中韓が複雑に絡み合った万宝山事件」となっている。

ⁱ 加藤陽子『シリーズ日本近現代史⑤ 満州事変から日中戦争へ』岩波書店、2007、210 ㊦

藤原彰『昭和の歴史 5 日中全面戦争』小学館、1988、68 ㊦

ⁱⁱ 大日方純夫「新しい扉をひらく②⑩ 『新・未来をひらく歴史—東アジア 3 国の近現代史』、『歴史地理教育』2025 年 12 月号、53 ㊦

ⁱⁱⁱ 必ずしも「全て」ではない。例えば、本章第 3 節 2 項は「日本軍『慰安婦』にされた朝鮮人女性の証言」となっていて、問いが立てられていない。

^{iv} 注 ii に同じ。52 ページ

^v 加納実紀代「銃後の女性たち」、久留島典子・他編『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』大月書店、2015、214 ページ

^{vi} 高野晃多「日中戦争—日中戦争とアジア太平洋戦争はどのように関連していたのか」、『80 テーマで学ぶ世界と日本の近現代史』、大月書店、2024、57 ページ

^{vii} 吉田裕『シリーズ日本近現代史⑥ アジア・太平洋戦争』岩波書店、2007、165 ㊦

^{viii} 石川禎浩『シリーズ中国現代史③ 革命とナショナリズム 925-1945』岩波書店、2010、148 ㊦

^{viii} 久保亨『日本で生まれた中国国歌 —「義勇軍進行曲」の時代—』岩波書店、2019、270 ㊦

^{ix} 臼井勝美「万宝山事件」、『日本史大辞典』、ジャパナレッジ、2026/01/29

^x 林博史『沖縄戦と民衆』大月書店、2001、121 ㊦

同 『沖縄戦—なぜ 20 万人が犠牲になったのか』集英社、2025、223 ㊦